

スリーカードを弾薬箱の上にうつちやると、悔しげな唸り声が彼の耳をくすぐった。相手はブタらしい。その認識が、ポーカーフェイスを突き崩した。トトカルチョの決着。歓声と罵声が機内へ一斉に吐き出された。

カードを放った相手が天井を仰ぎ、後ろでは大男たちが水筒を呷って吠えている。こちらの背後では、これまた大男たちが互いの拳をあわせて喜び合っていた。高高度の空を飛ぶ輸送機を揺さぶらんばかりの大声。彼——シェリンフォード・ベルも拳を突き上げてそれに応え、差し出された戦闘食にこれ見よがしにかぶりついてみせた。

戦闘前後の栄養補給のために支給される戦闘食が、ベルの身体から疲労を強引に拭い去っていく。水筒も同じようにぐいと飲み干した彼は、がら空きになったハンモックにどうと座り込んだ。「勝ち逃げっすか、隊長？」という声を手で追い払い、ニヤリと笑う。

「でかい勝負はやるなつてのが家訓でね」

仕事の後に脚を伸ばせるのが報酬だ。そう嘯いて、彼はハンモックの金具をぎしと軋ませた。

特殊作戦^は手当^たと危険手当^金のために命を賭けるほど酔狂になった試しはない。その酔狂をしてみせているのだから、これ以上のギャンブルは御免だ。そんな本心が繰り出した軽口だったが、成年にも達しない部下には伝わらないらしい。「よく言うよ」と部下たちが笑

う。

「大卒士官様がギャンブル嫌いなんて、誰も信じませんぜ」

「あつという間に三佐だからな、女相手でもそうなんすか？」

斥候が口火を切れば、続くのは射手。ニヤニヤと笑う他の部下たちも、例外なく厳しい選抜をくぐり抜けてここにいる。『人の嫌がることをする』をモットーにかき集められたエリートを散々ふるいにかけて、それでも残った粒ぞろいの本物たちだ。

現場では手足のように操れる部下が、終わった途端にコレだ。「バカタレ」と投げやりに応じて、ベルは再び水筒を呷る。

「女の味は複利なんだ、遊ばせるに限る」

「そんなこと言って、逃げられても知りませんからね」

下卑た笑い声をあげる部下に苦笑を投げると、「男は射撃あるのみですよ、隊長」とさらに前のめりになる。興味の色が途端に褪せていくのを視界に感じて、ベルは僅かな色彩だけは留めるように努めた。

「ただでさえ武装職は敬遠されがちなんですから、ガッツと包容力をアピールしないでどうするんです」

「敵前逃亡ですよ、隊長。敢闘精神が足りません」

好き勝手に言ってくれるものだ、と別の意味で苦笑が浮かぶ。

戦時でもないのに早々と身を固めたがるのは、いつの時代も身寄りのない隊員だ。その隙についてヒューミント^{人的情報収集}を仕掛ける反社会团体もいれば、防諜のために気を張るのもベルの仕事なのだった。

だからこそ、彼らの話をすべて聞き流すわけにはいかない。彼らの敢闘精神^{ナシンバ}が上官の仕事を増やしているとは夢にも思わないらしく、話はいつしか彼らの釣果に移っていた。

彼らにベルの懸念が伝わっていないのなら、それはそれで防諜体制が確立できているのだろう。知らないことを漏洩することはできないのだから、と無理やり安心しておく。

その安心が、一瞬の話題の飛躍を聞き逃していた。「ああ、バツジ攫いだろ？」という声に、ベルは素っ頓狂な声を上げてしまう。

「噂ですよ」

ひそめた眉に答えた部下が、苛つくほど自慢げに指を鳴らす。

「最近、特殊部隊の隊員が次々に異動になってるって話です。所属は不明、もちろん目的も不明。何のために集積されているのか、誰も知らないし教えない」

聞いてみれば呆気ない、陰謀論にもならない与太話にしか聞こえなかった。「くだらない」という苦笑が吹き出る。

「都市伝説にしちゃよくできてるな、今度はジュブナイルブームか？」

バカタレ、と言いたげに口を開いたのは分隊の先任曹長だ。勤続年数は二十余、彼に頭の上がない局員も数多い。その揶揄にも動じず、部隊きつてのスポッターは「本当の話ですよ」と口を尖らせる。

「統幕出向の同期から聞いた話です」

「だから眉唾なんだろうが？」

「眉唾にも一分の真ってやつですよ。実際、今回の相手だって噂のガチンコアンドロイドだったでしょうが」

人間に酷似し、見た目には民間人にしか見えないロボットが、いきなり集団で襲いかかってくるという都市伝説。今回の作戦で、ベルの部隊は正にその都市伝説に遭遇してしまっただった。

つい半日前のことを言われると、大人としてもキツイものがある。早々に切り上げようとした先任の言葉も儚く、「構造はこうです」と続く声が話題をつないでしまっていた。

「直接のトリガーは、あくまでも自主的な異動願の提出です。司令部からの命令では目立ちますが、請願という形をとれば背後を追えませんからね。そうして一旦関連部署に出たあとに……」

「連絡要員だとか、部隊間協力だとかで出向くのか」

相方の言葉に、部下は我が意を得たりとばかりに「そういうことです」と息巻く。

「配属先はバラバラ、そこからさらに出向や常駐を複数通しているようです。当然、追跡可能性^{トレース可能性}は低い。巧妙に隠蔽されてます」

経歴偽装、スパイさながらの手練手管だ。おおかた小説か映画に影響されたのだろう。

「なんのために？」という声が、ベルの投げやりな思考を代弁してくれた。

「兵隊を集めたとして、反乱を起こすようなメンタルしてないだろ。テロ対策部隊なら、わざわざ訓練し直すよりも原隊同士を協力させたほうが楽じゃないのか」

「そんなこと俺が知るかよ。情報部がまたそろなかしようにしてんじゃねえの？」

「くれる情報はゴミの山、あげた情報は闇の中。おまけに脇が甘いつて？ 救いがないっ
たら……」

次第に情報部の悪口大会になり始めたのを見て、頭だけで安堵する。部内にさえ情報戦を仕掛けてきたのか、どこぞの数寄物が陰謀論を唱えているのか。限りなく後者に違いなければ、これ以上考えるのもムダというものだった。

三度カードの相手を選び始める彼らを眺めるにつれ、やいのやいのと騒ぐ部下たちの声は次第に遠くなっていく。任務は終わったのだから、少しリラックスしても文句は言われ

まい。彼はしばらく身体から力を抜くことにした。

「お疲れですか、三佐殿」

それを見咎めたように先任がにじり寄ってくる。部下が見ている前で士官がだらけるのは不適切、ということだろう。特殊戦開発グループを任されるようになってからこっち、彼は一年弱にわたって女房役を務めてくれている。実戦に投入される士官のあるべき姿——それも特殊部隊という限界状態の中での士官の有り様を、折に触れて促してくれる彼に、ベルは何度も助けられていた。

そうでなくとも、もつさりと髭を生やした中年男と肌を触れ合わせる趣味はない。「歳かな」とだけ返して、ベルは少しだけ身体に力を込めておくことにした。

ハンモックからはキャビンの全体がよく見えた。戦闘服姿の男が、ベルを含めて八名。時空管理局次元航行陸戦隊にあって特殊戦開発グループに所属する隊員たちだ。いずれも空中侵入課程を突破した英俊は、銃を握らせれば敵の額に風穴を開け、ナイフを握らせれば敵の内臓で切り身を拵える。革新系メディアには〈連合政府の懐刀〉と揶揄される殺し屋部隊だ。

その先任といえ、当然ベテランの殺し屋ということになる。ベルが部隊長としての面目を保てる理由は、つまるところ年齢だ。彼の半分ほどしかない年齢が、ベルの身体に無

理を許しているにすぎない。忸怩たるものがないではないが、ベルには戦う以外の役割もあった。「あの戦いぶりでそれは聞けませんな」と苦笑する先任は、笑い以外の色を目に潜めていた。

「……中隊長殿、アレはなんなのです。真面目な話」

「……防刃防弾措置を万全に施し、耐衝撃性も担保しつつ柔軟かつ高速に駆動する二足歩行ロボットだ」

韜晦しているわけではない、と内心に言い訳する。訊かれても答えようがない質問というものは常に存在するのだ。そして、部下の質問には確信を持った返答だけをすべきである。自分が目にしたものと頭の中とをすり合わせた結果が、あの回答だった。「大したロボットですな」と応じた先任は、それを察した上で声を低めている。

「今後我々の仮想敵にアレが加わるというなら、研究が必要です。三佐ならわかるのこのと思いますか……」

情報は生死を分ける。「わかっていると」と答えておき、ベルは改めて先任の目を覗き込む。

「そのために捕獲し、リスクを取ってこの機体に載せてきた。あいつらを全員起こしておきました。技術参謀には給料分の仕事をしてもらおうとしよう」

実際に研究が始まれば、部隊の技術要員だけでは確実に足りなくなる。公営の兵器廠や民間の軍需産業、大学や研究機関まで動員する必要があるだろう。これほどの脅威を公開研究などできるはずはなく、結局まともな研究は期待できない——ということだ。

それを折り込んだ上での、給料分の仕事。内規破りの責任くらいは丸呑みし、心を鬼にして尻を蹴飛ばすという意味表示。「……やはりあなたはギャンブラーだ」とさばけた先任は、軽く敬礼をみせた。

また歓喜と罵りの声がカーゴルームを満たす。勝負が決まったらしい。どちらが勝ったのかを見ようと興味を浮上させた彼は、『ジェントルメン!』というスピーカーの大声へ視線をくれた。

『当機はあと十五分でアグスタ航空基地に着陸する。手荷物をしっかり確認してくれ。葉莢とお客さんを忘れるなよ!』

輸送機の高度が徐々に落ちていき、代わりに音が大きくなっていくのを感じる。壁際に群がる部下たちを迎えるように、ベルはハンモックから起き上がって腰元のベルトを締め始めた。

用途の違いはあれど、航空基地の光景はどこも大差ない。ジェットエンジンの轟音がそこかしこで響き、航空燃料のかすかな香りが風に乗って鼻をくすぐり、オリブドラブの箱たちが満載になったパレットが滑走路脇を転がっていく。灰色に塗り込められた輸送機が一機そこに入り混じり、風景の一部として賑やかしの任を負っていた。

輸送機の尻の部分から吐き出されたベル分隊の男たちは、着陸前に隊長から指示された仕事に取り掛かる。ある者は官給品のデバイスを回収して部隊の整備大隊に引き渡し、またある者は輸送機に載せていた大小のコンテナを基地の倉庫に移送。しかし、今もっとも多くの班員が従事しているのは周辺警戒の任務だった。

彼らが守っているのは、今しがた運び出されたコンテナである。泣く子も黙る特殊部隊がわざわざ持ち帰った代物を、適当に移動できるわけもない。彼らの最高司令部からの直接命令があれば、首都近郊の航空基地だろうが完全武装で警護するのも仕事のうちというわけだ。少なくとも基地警備隊の完全管理下に置かれるまでは、持ち帰った張本人たちが警備するよりない。そういった事情もあり、分隊全八名のうち、実に半分がその移送と警備に充てられていた。

そんな中、ベルはひとり基地の隊舎に向け歩いていった。扁平な滑走路から地続きの、だっ広い荷解きのスペース。一月の寒空の下、時折ぞくりと震えるような極寒の風を防ぐ

ものは何もない。色とりどりのビジネスジェットや輸送ヘリコプターでさえ、膨大な風を押しとどめることはできずにいる。要撃機や偵察機が訓練離陸していく風などは最悪の極みだった。壮絶な音と風のダブルパンチには物理的にゾツとする。底に鉄板を仕込んだ半長靴を打ち鳴らしながら、突っ切るようにベルは歩みを進めるしかなかった。

世が世なら『ミッドチルダ連邦軍海兵隊所属』と称される彼は、アグスタの主である航空警備隊——旧ミッドチルダ連邦空軍にとっては部外者だ。プライドの高い空の人間のこゝと、ズカズカと歩いていけば文句のひとつも言われそうなものだが、彼に突っかかってくる者はひとりもない。それどころか、彼に視線を合わせようとする者さえいなかった。

ポーチやベストを着用したままの戦闘服姿は、武器を持っていなくとも気圧されるものがある。厳めしい装備を身に帯びた、身長二メートルほどの大男。むくつけきとはいかないまでも、体格は間違いなくよい部類に入る。それがひとりで、しかも早足で歩いているとくれば、近寄りがたさを感じるのも当然なのかもしれない。

戦闘服という格好も問題なのかもしれない。灰色の視線を巡らせるだけで周りの顔がそくさと背けられていく。これだけわかりやすいと、避けられている側も楽しくなってくる。彼らの着ている服が航空警備隊のツナギだというのが、ベルの悪戯心に拍車をかけていた。

緑とも青ともつかない微妙な色合いが、揃いも揃って格納庫の中をうろちよろしている。ジオラマかマスゲームでも見ているようだ。統制の取れた動きは間違いなく訓練されたもので、彼らの実質的な主人——空の住人に傳いて世話をするプライドさえ感じさせた。

電子戦用のポッドを搭載した偵察機、さっきまでお世話になっていたのと同型の輸送機。それぞれに多くのツナギがまわりついているが、特に多くの整備員が集まるエリアの真ん中には、飛行機とは似ても似つかないモノがいた。

空戦魔導師。ジェットの高音を吐き出すこともなければ、バカみたいに航空燃料をドカ食いすることもないスマートな兵器だ。時空管理局が誇る暴力装置——武装隊でも最精鋭と自称して憚らない彼らは、事実その自称にふさわしい華々しい戦果を挙げている。デバイスからバリアジャケットまで、まるで王族のようにお世話されている彼らを横目に見て、ベルの口元には乾いた笑みが浮かんでいた。

大きな力を持つ代わりに、彼らは単独ではひどく脆弱だ。自己完結性のない戦力ユニットほど扱いにくいものもない。魔法という力ひとつとっても、結局は筋力と同じく休まなければ全力を出すことはできないのだ。体力と違うのは、魔力の回復にひどく時間がかかるといふ点。そこに作用するのは訓練量ではなく、ひとえに才能という如何ともし難い変数だ。

彼の頭に不満が蓄積していく。しかし、これは客観的な考えではない。むかつく胸中をそう断じて、ベルは視線を再び自分の前に向けた。

数多の血と汚染物質をばら撒いて、75年前にようやく終結した近代ベルカ戦争。帝政ベルカを打ち破ったミッドチルダ連邦が、自他の別なく反省の証としてリードしたのがクラナガン憲章だ。その第9条では、大量破壊兵器の研究・製造・保有・使用の完全禁止が定められている。

大量破壊兵器完全放棄を監督する第三者的国際機関の創設。各国軍の指揮権を筆頭とした最高権、政治運営の根拠となる統治権の段階的な統合と、統合先としての汎次元連合政府の建設。これらの歴史と法規範があれば、公権力たる時空管理局武装隊が弾道学を基盤とする通常火力の運用を控えるのも理解はできるのだ。

その結果が、物理的に被害を局限できる魔導弾道学をベースとした新たな暴力装置であり、ベルの視線の先でちゃんと佇んでいる生っ白い航空魔導師である。

属人的、希少性、非完結性。運用困難なこと限らないが、政治的にも物理的にもクリーンではある戦力。正当な暴力装置であれば、どちらを優先すべきかははっきりしている。

自分を強引に納得させる、その隙をつかれたというべきだろう。「お疲れ様、三等空佐」という耳慣れた声に、ベルはびくりと肩を跳ねさせた。

濃紺の制服姿が、いつの間にか彼の前で微笑んでいた。ブラウンの髪を冷たい風で流し、スタイルのいい長身に映えさせている。バインダーやマニラフォルダを小脇に抱えた姿は、さながらどこぞの秘書か副官だ。士官学校の元ティーンが一度は夢見る美人の副官。彼女はそれを——少なくとも見た目では実現していた。

「……もしもし？」

すらりと伸びた長い脚はタイトスカートの似合う細やかなもの。挙句、アーモンド形の涼やかな目がこちらを見つめている。熱もなければ冷たさもない、常温とも呼ぶべき平坦なそれが、彼女にいつも通りの懐かしさを与えていた。

そのいつも通りに艶を覚えるのは、きっと俺無理やりだけなのだろう。ボヤくまでもなくそう断じて、彼は「ありがとう、高等法務官」と如才無理やりなく応じた。

倉庫の中から無造作に近づいてきたのだらうに、彼は彼女に気づくことができなかった。こいつの底知れなさは相変わらずだ。ベルは彼女——メアリー・ロザモンドの瞳を覗き込む。「久しぶりだな」と笑うと、メアリーは水も漏らさぬ笑顔を浮かべてみせた。

「シャワー、浴びてきたら？」

挨拶より先に繰り言、そして手鏡。久しぶりとは思えない気安さに表情筋が緩み、鏡の中のベルも笑った。泥と汗でボサボサになった髪、鏡で見るまでもなかったが、ここまで

とは。そりゃ小言も言われるわ、と思いつつ「あとでな」と煽って、彼は再び基地の隊舎に足を向けた。

遺失物ほどではないものの、危険な代物を基地に持ち込んだ以上筋を通す必要があった。それを抜きにしても、現場の最高指揮官としてある程度の引継はしなくてはならない。だからこそその挨拶だった。

贅沢を言えば、作戦にかかる事後処理も引継ぎできれば文句なしだ。実戦部隊における事後処理とは膨大な書類仕事と折衝を指し、専門的な能力を活用するために総合事務職^{官僚}が採用されている。必要なだけの引継ぎを設定するのも指揮官の仕事とくれば、一緒に連れていきたいのは至極当たり前の思考回路といえた。

そこにきて、メアリーとの遭遇は幸運極まりない。薄い肩に回そうとした腕は、細やかな手にパシリと弾かれる。

「アグスタの基地司令官は綺麗好きなの。あの人が認めるのは汗と機械油だけ。少なくとも泥は落としてきなさい」

そのまま指を絡めるように手首を取り、袖口を引くようにベルをどこかに連れて行くとする。踏みとどまることも振りほどくことも簡単だったが、メアリーの手には抵抗しないことに決めていた。「シャワーのあてがない」と言葉だけ反駁しながら、びっくりする

ほど柔らかい彼女の指の腹をぐわと手袋の生地で撫でる。

「シャワーならあるわ。私が帰るまでの間、使わせてあげる」

すいところを向いた琥珀色の視線が、右手のいたずらを咎めてくる。ひよいと肩をすくめて、ベルはされるがままになってメアリーについていった。

「士官になって何年経つよ、身だしなみくらい整えなさい」

「いつもは意識してるさ。今回は作戦後なんだ」

ともすれば権限^{押し付け合い}争いにも発展する引継にあつて、作戦終了後だと身をもって示すのも戦術となりうる。疲弊した人員装備をいち早く本拠地に戻すためには、それなりの準備と作爲が必要なのだった。

しかし、彼女はそれをよしとしない。スマートじゃない、と言わんばかりにため息をつく。

「搦め手を使うのもいいけど、みつともない真似はしないで。あなたは士官なんだから」

「そうとも、佐官にもなつて現場に出てる。おまけに腹芸もせにゃならん」

空隊よりは仕事をしている自信はあるし、実際今回の作戦ではそうだ。皮肉、揶揄のつもりがないでもない。「お気の毒さま」と、そこばかりは彼女も苦笑する。

「陸戦隊の立場が悪くなる……とまでは言わないけど、大人げないでしょう？ 私の友だ

ちでいるうちは、そんなことしないで」

彼女の話に載せられているうちに、ベルは民間供用エリアに足を踏み入れていた。大型四発の民間機が、これまた轟音を上げて滑走路から飛び立っていく。空隊と比べればさすがに緩みのあるグラハンたちを横目に、ふたりは律動的な歩みをピタと止めた。

「はい、ついたわよ」

彼の目の前には、白塗りのビジネスジェット機がでんと駐機されていた。管理局所属を示す機体登録番号とマークを除けば、民間でも使われている上等な機体だ。それを、私とは。そりやどうも、と茶化すこともできず、彼はただタラップを登ることしかできなかった。

気取った内装が鼻につく。ワイデン調だかオルタナ調だか、ともかく何とか調とかいう名前であることは間違いない。綺麗に揃った木目には分厚くニスが塗られ、かばんが投げ置かれたソファは見るからに座り心地がよさそうだ。よくある飛行機用の座席もふかふかで、壁ひとつとっても丁寧に仕上げられている。「税金の無駄だな」という笑い声は、自分でもわかるほどに乾いていた。

「これしか空いてなかったんですって。そうでなきゃ、三佐相当が借りれるわけないでしょ」自分の懐が痛むわけでもなければ、これほど美味しい思いも他にはないだろう。実質貸

し切りで飛行機を飛ばせるのが高等法務官の特権であり、そうでもしないと手がいな
いという悲しき懷事情の裏返しでもあった。

それでも、これだけの機体を借りる機会はさすがにそうそうないらしい。彼女も泰然と
しているようでいて、若干座りの悪そうな素振りを見せている。居心地の悪さはお互い様
か、とほくそ笑んで、彼はシャワールームの戸を開けた。

正面に作り付けの鏡台と戸棚、左側にシャワーブースの蛇腹になったドアがある。右側
は壁だが、こちらも抜かりなく技巧が凝らされていた。それにしても、脱衣所まで用意し
ているとは。呆れて物が言えないとはこのことだった。

「入って正面の棚にバスローブがあるはずだから、出たらそれを着ておいて」

戦闘服は私が綺麗にしておくから、と続けた彼女は、どうやら飛行機が出るまで暇らし
い。ちょうどいい暇つぶし先が見つかったということなのだろう、と納得して、彼は「は
いよ」と戸の向こうに声をかける。

「シャンプーは適当に？」

「いいわよ、どうせ使わないし」

ポーチとベストを外して、まずは上着を脱ぐ。いくら戦闘服とはいえ、着脱の方法は普
通の服とあまり変わらない。そうでなければ、慣れないところでシャワーなど浴びないと

いうものだ。瞬く間にすっぽんぽんになった彼は、若干の寒さにあわててシャワーブースに入る。蛇腹をガリと閉めると、待っていたかのように脱衣所の戸が開けられた。濃紺の影がするりと床から戦闘服を拾っていくのがわかる。彼女の氣遣いには助けられっぱなしだ。「ありがとう」と声をかける。

「はい、ごゆっくり」

くすくす笑って返し、彼女は再びドアを閉める。やはり彼女は笑い声がいい。我ながら気持ち悪いな、と自戒しながらも、相好は保てなかった。

にやけていても仕方がない。彼はシャワーヘッドを引っ掴んだ。お湯を示す赤いノブをぐいと捻って、思ったとおりのお湯を背中に浴びる。冷えきった身体をじっくりほぐされるような感覚に、彼はしばらく悦に入っていた。

「湯加減はどう？」

脱衣所のさらに向こうからの声に、若干の大声で「生き返るよ」と応える。ごう、という音が響くようになって、彼女の声も聞き取りづらくなっていた。

ポンプでお湯を組み上げているのか、振動が時折シャワールームを突き上げる。相当強力なポンプを使っているのか、それとも安物なのか。どれだけ内装に気を使っているか、使ってコレなのでは世話はない。変なところで妙な安心感を得て、彼はシャンプーを手に

取ろうとシャワーを止めた。

「……おい」

ポンプの音は止む気配を見せない。轟々と水を吸い込み続けている。時折、そこに高周波の音が混じるようにさえなっていた。きいん、という音が間断なく響くに至って、彼はようやくそれがシャワールームに属するものではないと悟った。

そうと気づくと、振動が強くなったことにもすぐに気づけるのだ。ごとり、またごとり。まるでゴムでなにかを踏みしめているかのような感触。

タイヤだ。そう気づいた彼が蛇腹の戸を音高く開けたとき、彼の身体は横ざまにぐいと押された。

「なにかに掴まってなさい」

ブースの戸を開けたからか、脱衣所の戸越しの声は若干明瞭になっていた。ソファではなく、前の方にある座席に座っているらしい。シートベルトがあるからか、と気づいた彼は、思わず「クソッ！」と声を上げていた。

あの雌狐め、何がシャワーだ。アイツは堂々と大胆に俺を誘拐してみせたのだ。フル装備の特殊部隊がほんの数メートル先に控えている中で、文字通り表情と仕草と、神がかり的にうまい口車で——！

昔懐かしの綺麗な笑顔にほいほいノセられたとは、意地でも思いたくなかった。それを戒めるかのように、離陸するジェット機の慣性が素っ裸の彼を押さえつけていた。

やけくそ気味にシャワーを浴び直してから、ベルはバスローブを着るのもそこそこに戸を思い切り開けた。先ほどのおっかなびっくり具合はどこに行ったのか、ゆったり悠然とソファに身体を預けたメアリーが、ベルの戦闘服をふわりと浮かべ眺めている。服のそこかしこから土くれが浮かび上がっては、ゆっくりと下に置かれたゴミ箱へ落ちていくのがわかった。

魔法。空気中の水分を服の表面で結露させ、一定サイクルの超音波を発生させて汚れを落とす、水分を再び空気中に戻して汚れだけを服から分離し、汚れの落下位置と速度を制御するもの。概念上は一定の手続きとして処理できるが、空気中の水分量や服のどの部分に作用させるか、はたまた汚れを分離した時の空気の流れや機体^{重力}の高度^{誤差}に至るまで、具体的に考えなければならぬことは無数にある。世間に洗濯機という便利アイテムがある以上、魔法でやるにはおよそ非効率だったが、こと飛行機の中ではそんな贅沢は言えないのだった。

戦闘服から制服に着替える時間くらい、くれればよかったものを。最後に空中でピシリと畳んでみせた彼女に拍手を贈りながら、ベルは胡乱げな目を隠しもしなかった。

「Bravoー……うむ、Bravaー」

バーカウンターのスツールに腰を預けて、彼はメアリーにそう問いかける。折角の褒め言葉にも「近代ミッドチルダ語は、男女関係なくBravoよ」と素気ない。

「ミッドガルド語のつもりなら、それはそれでお門違いよ」

これだから……と言いたげに肩をすくめる彼女に、ベルはむきになる。「ヴァイゼンだろ、出身」と言い募ると、メアリーは苦笑してベルの眉間をじっと見つめてくる。

「旧ミッドガルド共和国で使われてたのが、ミッドガルド語。ミッドチルダと組んで中央

連合なんてやってたし、近代ベルカ戦争のドタバタで公用語なんかメチャクチャだけど」

その辺、歴史でやらなかった？ やったかもしれない、と曖昧に頷くと、メアリーは額に手を当てた。白魚のような指が眩しい。

「相変わらずの緩さね、あなたは」

メアリーはくすくすと喉を転がす。その声は、声だけが笑いにコーティングされていた。本題だ。顔に笑顔を貼り付けて、ベルは気分だけずいと前のめりになる。

「あなたを連れてきた理由は、あなたが連れてきたモノにある。セキユアチャンバーの中

身、特殊戦開発グループが管理外世界から持ち帰ったお土産にね」

アレは何？　そう問いたげな彼女の視線に、ベルは「知らん」と答えるしかなかった。視線を眇めるメアリーへ眉を八にして、より冷たくなった視線を甘受する。

事実、アレに関して彼が話せることは何もない。管理外世界での非合法テロ抑止作戦中に予定外の襲撃を受けたというだけだ。たらふくタマを叩き込んで機能を停止させ、独断でコンテナに押し込んだ。魔導加工技術が使われているという感触は受けたが、確実なことは何ひとつわかっていない。

コイツの所属からして、作戦中に司令部へ上げた情報はすべて持っていると思ってい。これ以上アレはなんだと聞かれても、せいぜい――。「積層構造ってのか、防弾防刃は鉄壁だった」という言葉にはじまり、彼は自分の所見を喋りはじめた。

「何使ってるんだか知らないが、えらい馬鹿力だ。班の半分でようやく跳ね除けて一斉射、それを全部さばきやがった。余裕なんだか機能ついてないんだか、無表情が怖いのかのってな」

片膝を立てたニーリングの姿勢を取って説明してやると、メアリーの表情が一転して紅潮していった。妙に視線をあさっての方向に逸らし「わかった、わかった」としきりに頷いている。一体何だ？　訝しむベルの胸を風がすり抜け、鳥肌を掻き立てていく。自分が

バスローブのままだったことに気づいて、ベルはごまかすように咳払いをした。

「とにかく恐ろしいヤツだった。詳しい部分は技術参謀部の見解待ちだが、少なくともヤツと同種の敵を想定した訓練は必要だな」

好き好んで異性の旧友にイチモツを見せたがる奴もいないだろう。少なくともベルにそういう趣味はない。半ば強引に会話を押し切ると、彼女も喜々としてそれに乗っかってくる。「そ、そうでしょうね」という声を取り澄まされているのは、予想できた答えだからというだけではあるまい。

ともあれ、彼女にとっては予定調和の内容だったはずだ。「それが？」と聞くと、メアリーはごまかし——こちらは完全にそうだ——の咳払いをして口を開いた。

「陸戦総監部の危機感を煽れたか、その結果を聞きたくて。政治は苦手かもしれないけど、協力してもらえないかしら？」

不快というより、呆氣にとられるというのが正しかった。アホ面と呼ぶに相応しい顔をメアリーに見せつつ、ベルは頭のあまり回さない部分を起動しにかかる。

統幕議長が発した管理外世界における武装隊安全保障行動命令一七三号の目的は、管理外世界への隠密派遣・テロ等危険の事前排除だ。そこに因果がどれだけ含まれていたとしても、現場の隊員にしてみれば関係ない。上級司令部がどれだけ後ろ暗い目的を持ってい

でも、一度下った命令には従う。そういう意味で言えば、思考停止謹厳実直こそ管理局武装局員の基本テーゼだった。

隠された思惑を吐露されても、正直反応に困る。それ以前にルール違反だ。横目で眉を吊り上げると、メアリーはベルの肩を叩いてきた。

「気に入らないのはわかるつもり。でも、あなたにもわかるでしょう？」

見透かしたような口の利き方も変わらない。制服の胸——指盾とサ——揮幕僚ベルの徽章を指で突く所作も、その意図するところも。ベルは鼻息ひとつで心を落着けにかかった。

冷静に考えろ。彼女は何度も彼をたしなめてきた。涼しい指を心臓に突き立てられると、そこから頭がしんと冷えていく。もはや条件反射といったほうがしっくりくる、生理的反応に違いなかった。

彼女には嘘もつけないし、驚かそうという考えさえ通じない。それがわかっていても、肩がぐくりと落ちるのは止められなかった。

その肩を抱くように——体格差のせいではほとんどしなだれかかるようになりながら——メアリーは言葉が続ける。

「暗黙の了解とか、昔からこうだったとか。そういうのは全部なしにしないと、アレが引き起こす事態に対処しきれない。あなたが技術参謀にねじ込もうとしてるのも、煎じ詰め

ればそういう話よ」

目を閉じて紡がれた言葉を聞くにつれ、ベルの背筋が凍りついていく。

先任にしか話していいことを、メアリーはどこからともなく聞きつけてきたらしい。底知れないというのか、空恐ろしいというのか。その事実ひとつとっても、彼女が生き馬の目を抜く次元航行艦隊司令部員だという証拠になり得る。

いや、そもそもコイツは高等^元法務官^{法曹}なのだった。何をか言わんや、と呆れるにとどめて、ベルは「すると、なにか？」と口を尖らせた。

「俺をわざわざ拉致したのは、な、あ、な、あは通用しませんよっていうつまらんブリーフィングのためか？　こういう真似は嫌いだって……」

「だから、わかってるわよ。何年一緒にやってきてると思って？」

呑まれまいとする警戒を悟られたのだろう。カチ、と彼女の能面が切り替わるのがわかった。嫌味を通り越して、いっそ丁寧なまでの言葉。彼女を苛つかせれば、だいたいはこのようになってしまう。売り言葉に買い言葉、空売りも踏み上げもお手の物とくれば、彼女に口喧嘩で勝てる者などいない。「あなたの後始末だとしてきたでしょう？」とため息混じりの刃を向けてくるに至って、ベルは内心両手を上げていた。

「『借りを返せ』なんて言いたくないの。……言わなきゃわからないあなたじゃないでしょ

う？」

弱り目をギリリとつねりあげて、メアリーはそつと身体を離す。細身のくせに案外温かったらしく、離れた後の感触が嫌に冷めていく。拍子に、自分がバスローブだったことを思い出して、ベルはひとつくしゃみをした。

俺から服を取り上げるのも必要のうちか？ 潤んだ目でそう咎めると、メアリーはクリーニング店のバッグを形のよい顎で示した。「着替えはあっち」という言葉は、アレ以上汚いものを見せるなということだろう。よく見れば、彼女の頬がまた少し赤くなっていた。言わなくても着替えるときは引っ込むというのに。布地の厚いバッグを拾い上げて、ベルはまた脱衣所に引っ込んだ。

服を着る音が聞こえてくる。自分がどこへ連れて行かれるのか、その問いから意識をそらすことには成功したらしい。迷いなく制服を着る音を耳で探りながら、私はひとつ息をついた。

出張でミッドチルダの連合政府自治庁に数日滞在していた私に新たな任務が下ったのは、実にほんの数時間前の話だった。航空警備隊アグスタ航空基地に向かい、指定する人物と

合流して帰還されたい。シェリンフォード・ベルという名前の上に書かれたその命令文は、簡単に達成できるからこそ奇異に映った。

なにしろ任務にしては簡単すぎるのだ。自治庁をなだめすかして廃棄都市区画の再開発計画を廃案に持ち込めというものでもなければ、統幕情報部と連携してベルカ分離独立派のテロリストを無力化しろというものでもない。友人と旧交を温めながら飛行機に乗って本局に向かえばいい。それだけのことを、大げさに正式な任務として発令される。そこに裏を感じるなというのが無理な話だったが、どんな裏があるのかということろまでは踏み込めずにいた。

アグスタまでの空路で彼の荷物をこちらに回すように手配するだけはして、あとは行き当たりばったり。適当に彼を言いくるめればどうにかなるという予測は、経験則でしかない割にうまく中していた。そこそこ長い付き合いになるからか、私にとって彼は「使える割に扱いやすい同僚」という立ち位置だった。——こういうとまるで人でなしに思われるかもしれないけれど、これは私にとって最大級の褒め言葉だ。

この世あらかたの地獄をかき集めた空中侵入課程。針の穴に入るほうが楽とも言われる指揮幕僚課程。彼はどちらも如才なく潜り抜けている。私と彼は指揮幕僚課程の初期からの付き合いで、互いのことはそれなり以上によく知っている。だからなのか、彼も私には

警戒を解いているフシがあった。

邪魔にならない……いや、正直嬉しい。とはいえ、足を掬われることにならないか……いや、私が足を掬う必要に迫り込まれないか、時折不安になる。

その不安は、ある意味では今まさに現実になっている。彼をうまいこと煙に巻いて連れ出したのは、本人がなんと言おうとだまし討ちに他ならないのだから。彼の部下や原隊に諸々話を通してはいるが、そこはそれ。彼本人を騙したことに変わりはない。

なんだ、全然簡単じゃないじゃないか。ジャケットを羽織る音を戸の向こうに聞いて、私は自分のかばんを手繰り寄せる。

目的地——時空管理局本局が近かった。

苦さでコーティングした酸味が喉を焼いて、胃の腑まで滑り落ちていく。豆を砕いてお湯でふやかし、紙か何かで濾した飲み物。時空管理局にあってコーヒーの淹れ方など大差ないだろうに、どうしても部隊やオフィスによって味が違うのだろうか？

コーヒー党というほど入れ込んでいるわけでもないが、大学時代からそこそこ飲み慣れていることも事実。故郷の第四管理世界もコーヒーの消費量が多いらしいから、きつと染

み付いた考え方なのだろう。味や香りという感覚それぞれは気にならなくとも、総体としてのコーヒーについては考えずにいられない。そういう性分になってしまふというのは、まだ自分が人間であるという証左になっているようで、悪い気はしなかった。

それに比べて、この空間の人間味のなさときたら。何気なさを装って、ベルは辟易と周囲を見渡す。

オフィススペースといえば聞こえはいいが、金属と浅葱に塗り込めた部屋に人をぎゅう詰めに行っているのが実態だ。本局の部屋などどれも見分けがつかない。界挟空間の穴蔵に好んで住み着くような人種のことだから、居住性など端から考えていないのだろう。居心地の悪いことこの上ない。ぐいとコーヒーを呷って、ベルは眉間によりそうな皺を抑え込んだ。

なにこれ、という苦りきった声がなければ、本当に苦い顔をしていたに違いない。聞き流そうとして流せず、いやいや視線を横に向ける。

「スカイスプールスなんだろうけど……泥でも飲んでたほうがマシ。酸味ばかりで嫌になるわ」

眉ひとつ動かさずに毒を吐いて、メアリーがカップを机に戻した。ベルにとっては苦く目が覚めればコーヒーだ、塩が入っていれば尚よい。「いらぬならもうぞ」と回収

してぐい飲みする。ミルクと砂糖でほとんどカフェオレ、そこまでして泥みたいとは恐れ入る。

なにより恐ろしいのは、こんなところで毒を吐ける胆力だ。神経が図太いというのか、単に無神経なのか。

こんなところ——次元航行艦隊司令部警務隊。その中でもここは防衛秘密の漏洩や贈収賄、サイバーテロ等の特殊犯罪捜査任務を請け負う中央警務隊のオフィスだ。失礼があれほどんな仕返しがあるかわからない。自然、振る舞いは慎重になる。

本局くんだりまで来て、勤務評価を下げるだけで終わるのは願い下げだ。ベルは切に願う。勤続五年を越えて、管理局は偏執狂的なまでに人材のスクリーニングにこだわることを実感していた。

衝立をノックする軽い音で、ベルは雑念を脇に退ける。ほぼ反射的に立ち上がったのは、制服稼業で染み込ませた礼儀作法が半分、訓練や任務で刻まれた反射が半分だった。

「ごめんなあ、急に呼び出して」

陸上警備常装冬服

茶色の制服がせかせかとこちらに歩いてきて、向かい側に回り込んでくる。襟に二等陸佐の階級章を、胸に特別捜査官徽章をそれぞれ見て取りながら、ふたりはさっと挙手敬礼をとる。ベルは掌を相手に向ける陸戦隊仕込みの敬礼、メアリーは艦隊伝統の細い敬礼。

メアリーのものを横に広げた通常の答礼をして、彼女は座るように手を出してくる。拒否する理由もないので座り、彼女の背の低さに少しだけ驚いた。

ベルの胸のあたり、メアリーと比べても耳までは届かないだろう。子どもか？ と一瞬思いつき、詮無きことだとそれを追い出す。第二次性徴さえ来ていない士官がいる社会で、今更身長くらいでガタガタいうこともない。

「八神はやて二等陸佐です。シェリンフォード・ベル三等空佐とメアリー・ロザモンド三等海佐やね」

中等科セカンダリーすら卒業していないようなガキに顎で使われるよりはいいというものだ。「作戦後なのに来てもらえて嬉しいわ」という八神二佐の微笑みに、こちらが無難な表情を見せておく。

「作戦中に戦闘機人を捕獲したそうやね。私の部下がアグスタ基地から回収して、安全な場所に移してあるよ」

戦闘機人？ 耳慣れない言葉だったが、確保というからには捕まえてきたアレに違いない。徹甲弾を撃ち込んでボロボロになった、おそらくもう死んでいるはずのアレ。そうか、戦闘機人というのか。頭にインプットしつつ、「助かります」と答える。

「本当なら、ここで所見も聞いておきたいところやけど……疲れとるやろうし、今日はや

めとこか」

にこやかに語る。年下のはずだが、上官としては十分な貫禄だ。これに能力が追いついていれば言うことなしだが、それはここで話すだけではわからない。

わかることと言え、言葉の訛りくらいのものだ。出身は第二管理世界ボードレイだろうか？ 毒に

も薬にもならぬ考えをかき回す。

共通言語にアクセントを加えることで出身地域を示す、というのが管理世界に住まう人間の習性になって久しい。ボードレイはミッドチルダやヴァイゼンに並ぶ先進世界で、戦乱の時代でも中立経済市場としてうまく立ち回っていた。その誇りからか、他の世界と比べても特徴的な訛りが形成されていると聞く。

まあ、管理外世界という可能性もあるか。適当に考えを捨て去って、ベルは目の前の佐官に焦点を集中した。「ロザモンド三佐も、自治庁派遣お疲れ様や」と微笑んだ彼女は、見れば見るほどヤングエリートという印象が強くなっていく。

それを嫌味でなく使いこなしているからこそ、こうしてここに座っているのだろう。劳いの言葉が満更でもないらしく、メアリーの顔も少し緩む。

さて。八神二佐の声が緩んだ空気をかき回す。「ふた리를呼んだのは、伝えることがあるからや」という言葉が混ぜ込まれ、空気は再び透き通る硬さを取り戻した。

「ふたりに人事異動がかかった。ふたりとも私が預かることになる。これは決定事項で、すぐにでも人事部から辞令が出る」

緩急自在、一撃必中。八神二佐の口撃にばっちり当惑してしまったのがわかる。「所属先は、ひとまずここや」と突き出されるがままに、八神二佐の局員証を眺める。

次元航行艦隊司令部中央警務隊広域捜査部・特別捜査官。「下の方な」と続いた声に、ベルの眉がぐいと寄せられた。

「……遺失物対策室機動総務課・室長、ですか」

警務隊の特別捜査官が配属されるにしては、少しばかり違和感がある。「常設の部署ではなさそうですね」とはメアリーの言。

「そうや。来年度から新しい部隊を預かることになってな、その準備室や」

はは、と苦笑する八神二佐に、思わずのけぞりそうになる。メアリーもさすがに驚いたのか、僅かに目を見開いていた。

「任務は特定ロストログアの安全確保と、これの付带的損害抑止。序列は古代遺物管理部の遺失物対策室」

押し時とばかりに畳み掛けてくるのを聞き流して、ベルは話に出てきた組織のあらましを思い出す。

古代遺物管理部は、統合幕僚會議に直属する共同の部隊。汎次元連合政府に加盟する世界に散逸した古代兵器や技術を安全に維持することを主任務とし、それらによる危険を武装隊と協同して予防・阻止する任務も負っている。中でも遺失物対策室は存在や危険回避策が知られていない、また悪用されるおそれが高い代物を専門に扱う部署だ。

「遺失物対策室に六番目のセクションを置いて、特定遺失物対策部隊とあわせて運用する。アーム・アンド・ブレンモデルの実証も兼ねた実験部隊や。ただ……」

序列では同じ組織でありながら、ふたつの性格をもたせるという試みだった、か？ 苦もなく相槌を返すメアリーには敵わない。劍奴と將軍、手と頭。まさにその喩えどおりのバディなら、頭の出来が違うのも苦笑で甘受できるというものだ。

とはいえ、ここまで説明されれば猿でもわかる。実験部隊としての特定遺失物対策部隊、戦務組織としての機動六課。戦務はアウトソーシングなり若手をかき集めるなりで調達が利くが、肝心要の実働部隊は――。

八神二佐がため息をつく。

「人材不足も極まりってやつでなあ。捜査の頭は集まっても、肝心の手足に宛がない。それで、ベル三佐を引き抜いたわけや」

空戦魔導士官学校から陸戦師団偵察大隊、幹部空中侵入課程、陸戦総監部付として特殊

作戦に従事。合間を縫って高等幕僚課程、次いで指揮幕僚課程を修了。ベルの経てきたキャリアパスは、ざっとこのようなものだ。

防衛計画上、大隊規模の指揮能力を期待される高等幕僚。その中でも特に強い権限を持ち、執務官・法務官等専門職への指揮権を有する指揮幕僚。当然、戦術レベルのみならず戦略レベルの思考を求められる。

特殊部隊にしながら、戦略・戦術スタッフとしても使い物になる人材。条件には確かにぴったりくるが、解せない。

「ロザモンド三佐の理由は単純や。法務担当ができるだけ多く必要で、幕僚候補との関係も良好。……やろ？」

紙爆弾を取り回せる精神力と場数が必要という点で、下手なロートルを囲うよりもいい。丁々発止をやりあえる馬力は、一般的に年齢に反比例する。中途採用なら下手を打っても後腐れなくパージできるのだから、使わない手はない。

「執務官のあてはついてるんやけど、彼女は捜査主任も兼任や。どうしても専任の法務担当が必要になる。顧問弁護士経験があるなら、そのへんは安心して任せられるからな」

そらきた。メアリーの目が鈍く輝く。キャリアこそ能力の証明と豪語してやまない彼女のこと、能力的な選任とくれば乗らないわけがない。「喜んで」という言葉にも喜色が載っ

ているようで、ベルは唇を引き締めるのに必死になった。

とはいえ、まだ疑問が残る。そこを掬うように、八神二佐がこちらを見た。「なんで自分分が、って顔をしてるな」という言葉。バレている。

「捕まえてきてもらった戦闘機人、アレも今回の部隊新設の事情と無関係じゃない。……ううん、むしろアレへの対策こそ主眼なんよ」

今度こそ話が見えない。メアリーさえも首を傾げる中、八神二佐はコーヒーを傾ける。

「少し長くなるから、おかわりでもどうや？」

上官に淹れてもらえる僥倖は、そうあるわけではない。おまけに今は客人だ。ふたりとも遠慮せずに淹れてもらうことにして、それぞれカップを差し出す。

「ちよっと待っててな、ごゆるりと」

やはりボードレイの人間らしからぬ柔和さを見せつつ、八神二佐が衝立の向こうに消える。「ねえ」という言葉は、彼女の足音を半ばかき消すようにして放たれていた。

「どう思う？」

早速だ。少しは待てないのかと思いつつ、ベルはメアリーに向き直る。こちらへ前のめりになった顔は眉根を寄せている。「どうもこうもあるか」と顔をしかめて返す。

「突拍子もない、としか。古代遺物管理部への部隊新設と俺たちの呼集、それにあの作戦

と戦闘機人とやら。全部が都合よくつながる現実的なストーリーなんてあるのか？」

本音を答えるしかなく、自然と声は低くなる。いくら情報を咀嚼する時間をくれたとはいえ、なんのこっちゃと大声で言うわけにもいかない。「さっぱり」と両手を上げるメアリーの声も、同様に小さいものだった。

「思いつくとすれば、それこそ戦闘機人に古代技術が使われている可能性。戦闘機人による事件を警戒するに足る具体的な警報があつて、そのために古代遺物管理部が専任部隊を必要としている……とか？」

「そのために指揮幕僚を呼びつける、か？ それもふたりも」

大げさすぎだと肩をすくめると、メアリーも「そもそも八神二佐が出てくる時点でおかしいでしょ」とやり返してくる。

「なんで人間戦略兵器がチマチマ人集めなんかしてるか。それに、執務官をおおっぴらに使えない事情ってなに？」

「戦略兵器を使用できない、しにくい環境での大規模事件。あるいは非合法……いや、超法規的な作戦くらいだろうな」

「……執務官に広域捜査をさせて、専任の法務担当を別に必要とする。それだけ手続きが込み入ってるってことよね」

「おまけに中途採用の経歴を見て選任となると、仕事量は推して知るべしだ」

「艦隊司令部の業務よりも優先度が高い、あるいは人を選ぶ仕事。連合政府と直接やり合うような仕事……?」

白晳の顔の奥で、緻密に整理された頭脳が回転しているのがわかる。答えが出かけているのだろう。鳶色の視線が時折跳ね、焦点が合わなくなっていく。

「……連合政府との合同作戦?」

「……連合政府直轄領での軍事作戦か」

民間人を多く抱える、あらゆる意味でのバイタルゾーン。政治経済文化、人心、正統性の中枢。攻撃されるということさえあつてはならない最優先地帯——。そこを死守するためなら、連合政府もあらゆる手を尽くすだろう。時空管理局武装隊の外郭団体に特殊部隊を創設するが如き無法も、法を運用する連合政府にかかれれば書類の百や二百で済む話だ。

「機密性、緊急性、柔軟性。どれかひとつだけでも確立するのが難しいのに、三つ全部を成立させろなんて。……呆れた」

「機密性を保つ艦隊運用本部、緊急性を担保する空挺部隊、柔軟性を維持する特別捜査官。三者が連携すればいける、と踏んだんだろう」

コーヒーがなくて手持ち無沙汰なベルを指差して、メアリーは「あなたと」とひと言つ

ぶやく。今度は「私」と自身を指して、彼女はベルにもたれかかってきた。

「ふたりの連携ならまず問題ない、というわけね。あとは八神二佐との連携を——」
パン、パン。手を緩慢に叩く音で、ベルとメアリーは我に返ったように衝立の方を見る。
カップ三つを浮かべて、八神二佐が半ば呆れたようにこちらを眺めていた。

「仲がいいというのは聞いてたけど、そこまでとは思わなかったよ」

湯氣を立てたカップをふたりの前に置きながら、八神二佐が苦りきった口を開く。すると元のよい姿勢に戻った彼女をよそに、ベルの目も同じく苦っていた。

「いろいろな人に同じような問答をしたんやけどな。頑張ってもふたりのとっかかりくらいにしか辿り着けんかった。……いや、そのはずなんよ」

やりすぎた。ジリとひりつく感覚が背中を苛む。

「法務官の必要性というヒントがあったにせよ、人選ミスはなかったみたいやな？」

歩くロストロギアの名に相応しい眼光が直にこちらを刺す。その苛烈さが、ふたりの推測が正しいことを証明してもいた。

「大筋においては正しい。首都での戦闘機人による武力攻撃を予測したレポートがあがった。調査の結果、古代技術が密接に関連していることも判明。武装隊と古代遺物管理部が共同で対処することになり、即応可能な部隊を新設するに至った。法律上・部隊運用上で

非常に繊細な対応が迫られることが予想され、それに堪えうる指揮幕僚が要請された」

読み上げる風でもなく、さりりと云つてのける。彼女には、レポートとやらが示す未来がよく想像できるのだろう。こちらはとくれば、首都への攻撃というだけで背筋が凍るといふのに。急所も急所、究極のアンタッチャブルじゃないか？

「市街戦の経験が多い特殊部隊出身者と、日常的に對外折衝を業務とする高等法務官。後者はともかく、前者は数が揃わなければ意味がない。だから――」

「……誘拐犯はあなたでしたか、八神二佐」

まさに今日聞いた噂。バツジ攫いの話を思い出して、ベルは舌を動かす。「全軍の特殊部隊から人が消えていると聞きました」という声は、自分でもわかるほど低い。

「事実や。高度即応部隊、特別立検隊、航空救難団。陸戦隊からも人員を集めている」
悪びれもせずに応じる八神二佐に、被せるように「数は」と催促してしまう。

「どれだけ集めたのです」

「主力打撃部隊は一個中隊。後方支援部隊は別部隊として編成、至近の基地に分散して配備する」

一個中隊^名！ ふと気が遠くなる。

それだけの人員をかき集め、しかもエビデンスをほとんど残していない。せいぜいが噂、

それもベルのような士官や先任のようなベテランほど否定しにかかる程度のものでしかない。八神二佐の有能さよりも、むしろその執念に圧倒される。

——いや、違う。彼女がどれだけ有能で執念深かろうと、彼女ひとりの動きで一二〇もの辞令など出せるものか。もつと上、艦隊司令部レベルに協力者がいると考えるほうが自然だ。ベルの背を氷が滑る。

「そして、ベル三佐。あなたにはその指揮を任せたいと思ってる」

心理的な隙に大ごとを投げ込んでくるスタイルが、彼女の十八番らしい。「中隊長、ということですか」と問うと、彼女はうなずく。

「ロストログアへの対応は部内に別働隊を編成して充てる。機動六課の主目的は首都防衛。建前はどうあれ、統幕も古代遺物管理部も了承していることや。防衛を担当する部隊……緊急展開中隊を任せられる人材として、ベル三佐以上の適任はないと思う」

光栄と受け取るべき話だということはわかる。だが、なぜかすんなりと受け取れない。こういうとき、ベルは自分の感覚を信じることにしていた。少なくとも実戦環境で、この手の感覚が嘘をついたためしはない。

「ロザモンド法務官には緊急展開中隊のオブザーバーとして動いてもらう。所属は本部管理中隊……つまり私の直属やけど、担当は緊急展開中隊の法務全般。分析官の仕事も入っ

てるけど、こっちには補佐がつくよ」

相手の策に乗ってから丸呑みできるコイツとは、度胸も頭の出来も違うのだ。メアリーの隣では、それを強く感じる。

だからなんだ。ベルは腿の上の手を自然に組み合わせる。

「さっきも言ったように、六課は実験部隊。期間限定のお試しという側面がある。地上本部のお膝元に本局の部隊を強引に設置する対価、というわけや」

本局と地上本部のパワーバランスは、目的の虚しさと反比例するように手段として確立されてきた。人員比対地上7割が事実上の基準。これを超えると、内部査察だ何だとかやこしくなる。臭いものに蓋の理論で、本局は陸上戦力を地上本部の7割程度に留めている。だが、これで事情が変わる。鳴り物入りで発足する遺失物対策部隊には、対テロ作戦にも投入可能な特殊部隊が一個中隊同伴する。もしこれが反乱を起こし、地上本部施設に投入されたら？ 意見の差異が疑いを生み、地上本部の姿勢は一気に硬化するだろう。それは本局としても本意ではない。

地上に根を張る前に撤収するとわかっていれば、地上本部も過剰な反応を見せないだろう。少なくとも表立った反発は抑えられるはずだ。全ては仮定の上に成り立つ空論だが、ないよりはずっと役に立つ。

「地上本部は元から、首都に危険が迫っているなんてこれっぽっちも思っていない。カード、取引材料やな」

「それはこちらと同じでしょう。地上本部は障害でしかない。……役立たずではない私たちは、その後どこに向かうんです？」

底意地が悪い、のではない。そもそものが勝手な事情で始まった計画のこと、参加するにはある程度の自己防衛も必要になる。それを認めているからこそ、こうして張本人が自ら呼び出したのだ。

そのつもりで呼んだのなら、彼女は答えを持っているに違いない。生々しい話になるな、とベルは腹を据えた。

「……期間限定部隊への出向が終われば、当然原隊への復帰になる。ただし、この部隊が一定の成果を挙げることがあれば……わかるな？」

やはり、そういうことか。気づかれない程度にため息をつく。

わかりたくない。だが、彼女の言わんとすることは推理できる。

能力さえあれば栄誉栄達も思いのまま。リクルーターの言葉がパフォーマンスとわかっていたからこそ、仕事は仕事と割り切ってきた。七面倒臭い派閥力学にも深入りしない程度に関わり、部下や隷下部隊への影響を食い止めていた。昇進に大した興味はないが、ア

ガリは多ければ多いほどいい。目の前にモノにできるチャンスがあつて、それを掴まないのは職業人としてどうなのか。そんな主張が彼にあつたからだ。

だが、それと派閥論理を肯んじることがイコールではない。少なからぬチャンスが派閥力学の派生物だっただけのこと。彼と彼の部下に能力と幸運がなければ、どこぞの世界で野垂れ死にだった。チャンスの見えない状態で、そんな賭けには乗りたくない。それが、彼の偽らざる本音だった。

メアリーの本音は、ベルのそれよりも率直で銜いがない。「この期に及んでシヨバ争いですか？」と微笑む彼女には、嫌味なほどに毒がない。

「地上本部をわざわざ敵に回しておいて……悪く言えた義理じゃないと思いますけど」
「……一年間のキャリアを犠牲にする、その対価と思つてほしい」

それは悪手だ。ベルの頭蓋に警告音がこだまする。何も言わず従えと言われて、反感を持たないわけがない。事ここに至つて、反駁を抑えるメアリーでもない。「ミッドの治安でキャリアを買おう」と歌うように口を開く。

「間尺に合いません。それに……いいんですか？ 私の前で公務員倫理法に背く発言をしましたよ」

私益も公益も満たさないのであれば、言うことを聞く理由もない。実に合理的な発想だ。

「ミッドの治安を回復した成果で昇進する、悪い話じゃないはずや。公務員の倫理というなら、これに協力することが――」

「一年のビハインドを取り返せないキャリアなんて、その時点で資格なしってものです。特に私はね。あまり民間上がりをバカにしないでもらいたい」

プライドをプライドで塗りつぶせる彼女の、根幹となる矜持。自分の身を自分で御せる、その矜持だけは損なわれたくないに違いない。

哀れむな。畢竟、この言葉に終始する。我々を貶め、侮辱する行為。集団とはそういうものだ、わかっていてもやりきれない。言ってもどうにもならないとはわかっている。それでも、メアリーのさらりとした毒は心地がよかった。

何分、彼女には失うものがない。民間に戻ってもすぐに次の仕事を見つけ、飽きるまで荒稼ぎをするのだろうから。能力は人を自由にする、とはよく言ったものだ。

「結構や。派閥争いよりも生産的なことをしたい、というわけか」

にっこりと微笑む八神二佐に、狼狽の色は見られない。冴えない中間管理職を装って、こちらの出方を見ていたらしい。メアリーも「そうせよ、とお命じください」と獰猛な笑みを浮かべる。似合わないはずなのに、なぜかしっくり来る。

挟まれるこちらの身にもなあってほしいが、そうも言っていられない。なんとか話を終わ

らせて、この息苦しい空間から脱出しなければならないのだ。「それで」と言葉を差し挟む。

「我々の去就はともかく、問題は現実への対応です。たかが一部隊で首都圏を狙うテロに対処せよと？」

露骨に呆れを交えてみせる。格好だけとわかってのことか、八神二佐も「有機的な連携で対応する」と跳ね返してくる。

「地上本部の地の利を活かせない以上、数の論理で押し切るしかない。陸士部隊や警防から協力部隊を募って対応するよ」

「答えになってない、というのと言わんでもわかりますか。通常部隊でもできること……いや、通常部隊がすべきことです」

「対テロ訓練も特殊部隊の仕事やろ？ 管理外世界の民兵にできるなら、身内にだってできるやんな」

手法だけはよく研究している。「教導隊に任せるべきです」と言いつつ、肩をすくめる。「我々は秘匿されることで優越性を高める。同じ陸戦隊でも初動打撃部隊とは違い、背後からナイフの一突きでケリをつける。対テロ作戦能力と対テロ・促成訓練能力は別物で——」電子音が彼の言葉を引き裂く。すみません。隣でやおらに立ち上がったメアリーが、端

末を片手に衝立の向こうへ消える。「電話ならしょうがないよ」と笑う相手にニコリと笑って、彼女は端末に声を吹き込み始めた。

「……別物です。我々は前者に特化している。他の部隊なら違うのかもしれませんが、特殊戦開発グループはあくまでも間接アプローチ部隊ですから」

首都を遊撃し、通報に即応してテロリストを叩く特殊部隊。なるほど便利に聞こえるが、相手が真面目に大部隊を並べてきたらどうするのか。質量兵器を運用していたら？ 本局が襲われる可能性はないのか？ 疫病や人災による攻撃には対処できないし、サイバー攻撃対策なら専門の部隊と予算が必要になる。

「せめて、所掌範囲だけでもはつきりさせてもらえませんか。そうでなければ、できるかできないかもわかりません」

「……本当にすまないけれど、それは今話せない。わからないのではなく、話せないんや。コトが起きるとわかってから、部隊に周知することになっている」

所詮、彼女も中間管理職。上の意向には逆らえない。「……了解しました」と引き下がっておく。

どのみち、彼女の秘密はここで明かされるのだから。すい、と戻ってきたメアリーが席に座り、「八神二佐」と呼びかけつつコーヒを片手にとる。『聞こえる？』という声は、

メアリーの口ではないところから響いてきた。

「^{防衛課長}うちの上司から、二佐に協力してくれと指示がありました。防衛課もできることがあれば、と」

『底が割れた。統幕情報部が監視していて、こちらに連絡してきたの』

彼女の肉声に、ベルは一応目を剥いておく。寝耳に水の話のはずだからだ。「ありがたいなあ」と喜色満面の彼女に、メアリーはカップの縁から婉然と微笑む。その表情からは、胸中でもうひとつ会話をしていることは見透かせないらしい。

念話、という技術がある。言語野で生成された言葉を、声帯による音波ではなくリンカーコアによる魔力波動として外部に出力する技術。魔法版トランシーバーとも言うべきそれを、彼女は声帯と並列して稼働させている。『八神二佐は相当人気者ね』と笑い声をこちらに飛ばしておいて、表向きの顔は真剣なものに切り替えていた。

器用なやつだ。内心でぐるりと目を回しておく。そうでもないと言えないと表情に出かねない。

「正直、びっくりしました。いつから手を回しておられたんです？」

『八神二佐の情報源は教会のP号、いわゆる予言ね。数年前から徴候があった。情報を受けたハラオウン派の一部将官・佐官が独自に調査していたらしいわ』

「そんなことしてないよ。ただ、ターミー一佐にはいろいろお世話になったことがあった

んよ。どこかで聞きつけてきたのかな」

『統幕情報部が追跡調査して、八神二佐が中心になって動いていることを突き止めた。そのときには部隊設置が決まって、いろいろ攻めあぐねていたみたい。今更協力者を送り込むのも不自然だしね。ただ……』

彼女の念話の切れ目を縫って「ターミー一佐という」と声を上げる。

「特戦運用室のターミー一佐か？ どこかと兼任してるとは聞いたが……」

「そうそう。私の上司、あなたの上のひとり」

『八神二佐が追加で人を集め始めたとなれば、話は変わってくる』

ばつさりと話を再開する。はいはい、と呆れ顔でそれに応じてみせると、八神二佐が目ざとくそれを見て取ったのがわかった。

「特殊作戦運用室やったっけ、統幕の。武装隊五軍の特殊部隊を仕切ってるって……ああ、だから」

何かを納得したようにこちらを窺ってくる。ターミー一佐のことは名前と顔が一致している程度だ。そもそも統幕の人間とはブリーフィングで会うくらいの接点しかない。指揮幕僚といっても、所詮は鉄火畑の実戦職なのだ。そして八神二佐は実戦職ではなく総合職だ。

実態としては、と留保しつつ「よくは存じていないんですがね」と苦笑してみせる。

「直属ではありません、何度かお会いした程度です。軍官僚の権化、雲上人ですよ。住む世界が違う」

『統幕と艦隊司令部から文官と武官の両方を送り込み、内偵させる。彼女の懸念が確実なものかを確かめるためにね』

表情と心中が——少なくともその一部を乖離させる。気持ち悪いことこの上ないが、彼女とつるむなら慣れる必要がある。魔導師の疑似並列思考マルチタスクとは異なる、文字通り脳の計算容量を切り分ける同時並列思考マルチブレイン。無理やり計算機になぞらえるなら、そういう表現になるのだろう。

感触、感情では気持ち悪くとも遂行には影響させない。同じだ、同じ。ベルは自分に言い聞かせる。

敵地での長距離偵察で泥にまみれるのも、これからの上官に自分を取り繕うのも。生理的に受け付けられないという意味では同じく唾棄すべき仕事に違いない。しかしそれでカネをもらっている以上、給料分はこなしてみせる必要がある。

偵察作戦手当はもらえるが、上官との接触に手当は出るのだったか？ まだまだ余裕のある容量でぼやく。

「はは、浮世離れした人やからな。だけど、能力はピカイチや」

『これは私たちの上も納得ずくの話。防諜作戦と思えば、できない話じゃないでしょ?』ベルに百を掛けた面罵の言葉を湛えながら、念話にさえその色を滲ませない。合理性を極端に重んじる彼女のこと、この手の会合は忌避していると思ったが。『まあ、な』と答えた声に、微かな疑問を載せておく。

『……言っておくけど、私は納得してないから。あなたが参加するなら参加するけど、そうじゃないなら……。だから、早く決めてね』

間尺に合わない、という言葉は本心だったらしい。比較対象は自分のキャリアか、それとも法秩序か。ともかく彼女が乗り気でないことはわかり、ベルは安心する。

キャスティングボードはベルの手にある。「そのようですね」と苦笑いして、ベルはカップを手取る。

「私だって俸給が惜しい、平和もね。うまいコーヒーを飲めるのが私の平和で、クラナガンではいいコーヒーが飲める。及ばずながら、八神二佐に助力させていただきます」

そう答えるしかない。天秤の片方には首都人口四億の命運が乗っているのだ。「お役に立てるなら」と水も漏らさぬ笑顔で追隨するメアリーは、深いため息をベルの脳に送り込んでくる。

ベッドの上で聞く分にはいいが、場所は選びたいし選んでほしい。飢えていないことに心底感謝しながら、ベルは冷めたコーヒーを啜った。

確かに、これはまずい。八神はやてのほっとしたような笑みに、ベルは初めて毒づいた。

古代遺物管理部遺失物対策室・特定遺失物対策部隊編成準備室。週明けからは新しい職場に出勤するよう八神二佐から命じられ、そこからが地獄だった。

転属とは名ばかり、実質上の内偵任務を命じられている身だ。統合幕僚会議が注視する作戦で不手際をしでかすわけにはいかず、取得可能な休暇をフルに使っての準備を余儀なくされる。ほとんど仕事同然でも、行動の性格上表立って異議を唱えにくい事情があれば泣き寝入りするしかなかった。

準備の半分は職務の引継に、もう半分は日用品の買い込みに。今頃、前任と中隊副長には連絡事項のメールが飛んでいるはずだ。日用品とはいえば、今朝も使った身だしなみ周りのもの程度。あとは上等なスーツにコートくらいだろうか。シク高地に生息するヤギから採取した生地で作られたコートは、ベルのすくめた肩をするりと滑らかなものに見せていた。

市民はもとより、軒の主である科学技術省や所属原隊にも秘密を貫けという命令があれば、慣れないスーツも着こなしてみせなければならぬ。総合職国際公務員の上等なスーツに紛れるため、恥を忍んでメアリーにスーツの見立てを選んだのが一昨日。彼女は慣れた手付きで、官僚そのものといった無難な代物をバッチリ整えてくれた。

なぜ慣れているのだ、と疑問に思わないでもないが、場に溶け込める格好が整ったのは幸いに違いない。そろそろ仕事にもこなれてきた若手官僚か、それともうだつの上がらない理系技官か。どう見えているかはわからないが、彼を特殊部隊の三佐と思う人間はいるまい。警衛にさえ気取られずに済んだのは、なにもベルの訓練の賜物というばかりではない。可動式の壁沿いに廊下を歩きながら、つまらないことを考えられる状況に感謝しておく。

仮にも管理局の組織が、本部を科学技術省の庁舎に置いている。その事実自体、連合政府と管理局の間に一定の合意があることを如実に示していた。鵜の目鷹の目の地上本部も、連合政府が拵えた伏魔殿を見通すほどの眼力はない。警戒すべき外野からの視線を遮断するには、誰の目にもつかない——見ようと思わないところに置く。単純明快、故に実現が難しいことを、八神二佐は実現してみせたのだ。

5階でエレベーターを降り、科学技術政策局産業連携・地域支援課のオフィスを壁の向

こうにまわして、各課の別室が集まるエリアにたどり着く。臨時に編成されたタスクフォースが収まる場所。作り付けられたパネルには『許可を受けないでこの内に立ち入ることを禁止する』と書かれ、カードリーダーさえ仕掛けられている。管理局の局員証でセキュリティを解除し、ベルはオフィスの深部に踏み込んでいった。

科学技術省大臣官房遺失技術情報統括官組織設置準備室。危険指定遺失物^{ロストログニア}へ対応する組織として設置が進められている、古代遺物管理部のカウンターパートだ。ロストログニア関連の事案に対して速やかな対応——この場合、対応とは法的な対応だ——ができるようになるという。現在は各管理世界の条例で無理矢理に権限を移譲しているのを、この組織の設置を含んだ改正科学技術省設置法によって国際法上の規則として運用できるようになる。連合政府首相による古代遺物緊急事態宣言への対応を、武装隊が一元的に遂行できるようになるわけだ。

4年前にロストログニアによって引き起こされた首都第八空港火災を契機として立ち上がった議論が、今となっては陰謀の隠れ蓑になっている。ロストログニア対応を主任務とする組織ということもあり、一見では他の組織が介在していることがわからない。もともとは管理局が担当している業務のこと、情報共有として局員が立ち入ったとしても問題はない。うまい隠れ蓑を選んだものだ。感心しつつ、ベルは空いた椅子に腰を下ろす。

こんな隠れ蓑があるのなら、服装も制服でよさそうなものだが。青と黒に染め込まれた次元航行制服を思い返す。管理局員が連合政府職員と情報を共有する。立派な業務であり、どこに隠すことでもない当たり前の仕事だ。地上本部の目を引く可能性があるとはいえ、彼らには連合政府の中枢に無断で踏み込むほどの度胸もない。わざわざ動きにくくしてまで、なにもできない彼らに配慮する理由は何か。ベルにはわからなかった。

やはり、性に合わない。こういうことはメアリーに考えさせるに限る。背もたれに悲鳴をあげさせて、ベルはひとつ背伸びをした。

アンダー^肉ネット^体クとアッパ^頭ー^脳ネット^労ク、アームアンドブレーン。手を変え品を変え、能力による職務の分離を唱える考え方は常にあった。機動六課にしても、首都防衛部隊と遺失物捜索・押収部隊を分離している。秘密保護という要請もあれば、同じ部隊で無理矢理やるより効率がいい。ああ、秘密。ここ一週間の行動に常につきまとう言葉だ。いよいようんざりしてくる。誰かに投げなければやってられない。

ベルとメアリーの関係で考えても、能力の傾向にあわせて仕事を分担するのは合理的だ。国際公務員には——武装隊に所属する特別職だろうと——常に法的正義に基づいた合理的な職務遂行が求められる。つまり、ベルが難しいことをメアリーに任せきりにするのは公務員倫理に基づいた適切な対応なのだ。

だから、所属関係の書類処理はメアリーに任せることにする。コーヒースタンドから紙コップとキサンチン誘導体を徴発したベルは、現れたメアリーに思うところを告げた。

「面倒なだけでしょう？」

答えは単純で辛辣だった。おまけに凶星でもある。「まさか」とすつとぼけても、彼女の眉はピクリともしない。

「あなたのトコロだって、ひと通りの機能は全員実装するんじゃないかって？ 書類くらい慣れないさ」

机の上に据えられた端末にIDカードを挿し込んで、切れ長の目だけをこちらに向けてくる。「座ったら？」と促してくるあたり、仕事する気は満々らしい。

「そりやそうだが、人数の問題を考えればだな……」

「少人数だからこそ、平均的な能力が必要なのよ。へーは全、全はーでいいんだっけ？」そりや戦場での話だ。食い下がりそうになったベルは、戸の開く音で舌をぐいと抑え込む。「お、早いな」という声がそれに続き、ベルの背中をぽんと叩いた。

「おはよう、おふたりさん。本当に仲がええみたいやね」

八神二佐の短軀がベルの横をすり抜ける。「おはようございます、室長」と敬礼したふたりへ鷹揚に答礼し、彼女はそのまま独立した事務机によりかかる。

「実戦部隊でも佐官は佐官。管理職ならそれなりの仕事はしてもらわんとな」

年下の上官は耳聴く押しが強い。拒否反応が出ないのはいい兆候だ。ベルは「了解です」と苦ってみせる。彼女は端末に認証キーを挿し込んでニコリと笑った。

「さて、ふたりにとっては初出勤やね。初仕事として、まずは新規デバイスの申請をしてもらおかな」

溜飲を下げたのか、そういう演技なのか。そろそろ考えることも面倒になり始めた頃合いだ。メアリーの「デバイスですか？」という声に乗っかるように、新しい上司への邪推を吹き消していく。

「そう、デバイス。これからはいろいろな仕事をしてもらうことになるから、どうしても助手が必要になるやろ。それを経費で用意できるって話や」

5人より増やすのは難しいからな、と苦笑いを含める。首を振るたび、髪の毛の辰砂が柔肌に溶けていく。

「業務軽減が目的やから、対象は原則インテリジェントデバイスな。ひと通り必要なものはサーバーに入れてある。できれば今日明日で申請してほしい。改造が必要なら、その申請書類も入ってるから同時にお願いな」

視線を逃がすついでに端末を起動し、諳んじたIDとパスワードを入力する。性能のい

いものを入れたのか、それとも単に中身が空っぽだからか。とにかく素早く動作する端末で、ベルは書類作成に専念することにした。

とはいえ、インテリジェントデバイスは意識して遠ざけてきた代物だ。戦闘中の意思決定に何者かを介在させたくないというシンプルな理由。上司からの断れないオファーでもなければ、知らん顔してストレージデバイスの申請でも投げつけていたに違いない。若い上官にそうする気にもなれず、ベルは苦々しささえ飲み下してキータイプに没頭する羽目になっていた。

デバイスの新調する機会もないとくれば、宮仕えの悲しさは書類仕事の遅れに現れる。制式デバイスの仕様や改造条件とにらめっこしながら書類を作成するベルをよそに、「確認願います」の声がさらりと部屋を漂う。本局きつての役人帝国上がりには、この程度の書類は問題にならないらしい。げに恐るべきはデスクワーカー。軍政や法務で大量の書類と情報を切り回している彼女は、するすると椅子を転がしてベルの背中ごしに画面を覗き込んでくる。

「……あなたね、これはないんじゃない？」

挙げ句、ベルお手製の仕様書に口出ししてくるときた。意地の悪い女だった試しはなく、忠告に従ってバカを見たこともない。それでも不安は避けられず、「条件は満たしてるだ

ろ？」と確認してしまう。

「満たしてるけどね……あなた、調達コストって考えたことある？　なに、この『CV-70S』って」

メアリーにも知らないことがあるらしい。僅かながらにも自分が上回っていることが、どうにも嬉しくてたまらない。「ナナマルを知らんのか」と笑う。

「カレドヴルフが作ったCMC-68SMだよ。シトロネラのものより抗堪性も性能もいい、お得だぞ」

そのデバイス名なら、それなりに名が通っている。扱い方さえ知っていれば素人でも六〇〇メートル狙撃が可能な、超々長射程狙撃魔導師の相棒。メアリーにも聞き覚えがあったらしく、「そう」と納得してくれる。

「じゃあこのプロジェクターたちは？　せっかく狙撃タイプがあるんだから、それでいいでしょう」

デバイスに納得したと思ったら、今度は周辺装備だ。譲るつもりは毛頭なく、その余裕もない。唯一にして最低の希望が、まさにこれだった。

基本的にデバイスは演算装置と魔術生成装置で構成されている。魔術をパラメトリック方程式に変換し、魔法陣として魔力素結合体を空間に投影することで結果を得る仕組みだ。

アナログをデジタルに変換する発想そのものであり、ここに目をつけたのが分散型デバイスという考え方である。

料理を作った場所で食べる必要がないように、変換部分と投影部分を必ずしもひとつの構造体に搭載する必要はない。要はその時々に必要なデータさえしっかりと伝送できればよいのであって、ベルはそれを実践しているにすぎない。畢竟、彼の返答は「そりゃ困る」というものになった。

「どうせなら同じものを使いたいじゃないか。メンテナンスも自分でできるから、負担はOSの更新くらいだぞ？」

狙撃タイプのAIをぶっこ抜いて変換装置兼照準誘導管制に、従前どおりの装備を投影部分に使う計画。実際に必要になるのはAIや管制ソフト調達予算と人件費くらいだろう。原隊では部内で自己完結させるための整備訓練予算もかかっていたのだから、まだマシである。

特殊部隊は金食い虫。予算で特殊技能が維持できるのだから、古代ベルカの技術よりはまともだろう。「マニアっていうのかな……」とため息まじりなメアリーも、その点は理解してくれているようだった。

「いいんじゃない？ 趣味でやってるわけじゃないなら、ね」

甚だ疑わしい。視線だけで器用に疑ってくる彼女に「ならOKだな」と返して、やっと出来上がった書類を提出する。

「……ん、ふたりとも問題なしやね。書類はこのまま装備需品課に回しておくな」

若い茶色をさらさらと揺らしてひとつうなずき、片目を閉じて眇めてくる。茶目っ気たっぷりの視線が「……さて」と弛緩して、桜色の唇が白い歯を見せる。

「悪いけど、私はそろそろ行かなあかん。捜査会議があつてな」

こちらに來たのは顔見せと事務処理のためだったらしい。時間が押しているのか、若干焦り気味だ。若干のそわそわ加減に圧されるように、「お疲れ様です」と言葉が転がり出した。メアリーもすると立ち上がり、新しい上官のコートをさっと広げている。

開かれたコートをひらりと纏う二佐は、頭がメアリーの口元にも届かない。まるで姉と妹だ。髪の色が似ているからか、意識すると本当にそう見えてくる。

「何かあったら、あとからくる執務官に聞いてな。それと、うちはまだ準備室やから日報がある。共有サーバーにわかるようにしてあるから、各自いい感じで処理よろしく」

本当に急いでいたのだろう。「ほな、行ってきます！」とまくし立てて、八神二佐は部屋を走り出ていった。「忙しいみたいね」とメアリーが笑う。

「……隙だらけの書類なのに、あっさり通つてる。事務処理はあまり上手じゃないのかし

ら。適当にこっちで調整しないと、足元すくわれるかも」

「経験の問題だろう。サポートがないというのが大きいんだろうな。管理職というよりも技術職だからな、あの手の幹部は」

建制順では管理職扱いでも、制度が実態が伴わないのはよくある話だ。部下に管理業務を任せて自分は現場に、という例は数えきれない。それで功績を上げ、幹部としてさらに出世していく。人事制度のある種の歪みが生み出した矛盾、理不尽のひとつだ。

八神二佐もその類だろうが、彼女ほど制度にこだわらないのも珍しい。入室時に敬礼を求めない部隊長という時点でかなりのものだ。

そういえば。ふと上官の言葉を思い出して、ベルはひとりごちる。

「執務官が来る、って言ってなかったか？ 5人より増やせないってのも……。室長と俺とお前、あとふたり？」

「執務官がいるって話はあったわね、この前。その執務官かしら」

執務官。〈管理局の検察官〉として統合幕僚会議執務本部に属し、武装隊刑法犯に対して司法・行政警察活動を遂行する。必要に応じて警務官・警防吏員・武装隊員を指揮できるなど、使いようによってはかなり強大な権限を持つ専門職局員だ。

なるのも大変なら、資格を維持するのも大変。最前線で活動したかと思えば、統一軍事

裁判で検察官役をやりもする。危険なほど漠然とした権限……とは、メアリーの言葉だったか。「あまりいいめるなよ」と釘を刺しておく。

「執務官が危険だって言ったのはお前だろ、わざわざ敵に回すこともない」

「別に個人に対してどうこう思ってるわけじゃないわよ。権限相応に優秀なら誰も文句言わないし、私たちの邪魔をしなければ万々歳ね」

そんなわけがない、と言わんばかりに鼻を鳴らす。八神二佐が本当にいなくなったと踏んでか、さらに「そもそもね」と言い募る。

「室長に協力するような執務官が私たちをフリーにしておくと思う？ 報告もせず管理
局の資産を用いて独自捜査するような相手よ、仕事の妨害だって平気でしてくるでしょ」

「二佐がそこまで考えていないとしたら？ 特別捜査官とはいえ19歳、大学どころかカレッジ
も出てない年頃だ。業務姿勢が歪んでも仕方ないだろ」

「ハイスクールも行ってなさそうだしね。過度な能力主義ってやつかな。そこにつけこむ
のって、大人からしたらかなりおいしいと思わない？」